

目次

序論——本書の特色と構成……………一

- 一 本書の梗概と特色 一
- 二 本書の構成と内容 三

第一部 空海と嵯峨・平城天皇

第一章 空海と嵯峨天皇・藤原三守……………一六

- はじめに 一六
- 一 先行研究の整理 一九
- 二 三守あて書状の分析・検討 一九
- おわりに 三三

第二章 『般若心経秘鍵』上表文攷……………四六

- はじめに 四六
- 一 『心経秘鍵』上表文の概要 四九
- 二 弘仁九年四月の飢饉・日照りの記事 五〇

- 三 最澄への墨勅と比叡山寺における修法 五四
- 四 空海への修法依頼 六〇
- 五 『心経秘鍵』上表文が参照した事跡 六五
- おわりに 六六

第三章 空海の平城上皇への灌頂授法……………七二

- はじめに——問題の所在—— 七二
- 一 空海の入唐と灌頂受法 七四
- 二 空海が授けた灌頂(一)——高雄の灌頂—— 八〇
- 三 空海が授けた灌頂(二)——平城上皇への灌頂—— 八五
- おわりに 八六

附論 現存最古の灌頂作法次第——『東塔院義真阿闍梨記録 円行入壇』の研究……………九三

- はじめに 九三
- 一 『義真記録』の構成・内容 九五
- 二 『義真記録』の真偽(一) 一〇三
- 三 『義真記録』の真偽(二) 一二三
- おわりに 一二四

『東塔院義真阿闍梨記録 円行入壇』本文校訂……………一四二

第二部 空海と東寺

第一章 空海への東寺勅賜説……………一七〇

はじめに 一七〇

一 草創期東寺に関する問題点 一七一

二 「東寺勅賜」に関する先行研究 一七三

三 弘仁十四年十二月二日付官符の真偽 一八二

四 弘仁十四年正月十九日「東寺給預」の検討 一八五

五 空海の造東寺所別当補任 一八八

おわりに——勅賜と造東寺所別当は両立するか—— 一九四

第二章 東寺安居会攷……………二〇三

はじめに 二〇三

一 東寺安居会を論じるときの本根史料 二〇四

二 先行研究の検討 二〇八

三 空海の上奏文に対する疑義 二二三

四 天長二年四月八日付太政官牒に対する疑義 二三五

五 「天慶六年表白」の検討 二三八

おわりに 二三三

第三章 東寺長者攷——九・十世紀を中心として……………三三〇

はじめに 三三〇

一 先行研究の検討 三三三

二 『御遺告』にみられる東寺長者 二四〇

三 寛信撰『東寺長者次第』の検討 二五七

四 六国史にみる長者歴任者 二七四

五 太政官符類にみる長者歴任者 二七四

六 真雅の言上書 二七七

七 「長者」の初出史料 二八一

八 「東寺別当」から「東寺長者」へ 二八五

おわりに 二九〇

第三部 空海と綜芸種智院

第一章 綜芸種智院攷……………三三六

はじめに 三三六

一 先行研究の検討 三三八

二 「綜芸種智院式」の分析・検討 三三三

おわりに 三三三

第二章 造大輪田船瀬所別当補任説をめぐって……………三四八

はじめに 三四八

一 「造大輪田船瀬所別当」補任の太政官符 三四九

二 大輪田泊の所在 三五二

三 大輪田泊と空海の「造大輪田船瀬所別当」補任説 三五四

四 天長以降の大輪田泊 三六〇

おわりに 三六七

第三章 空海と法華講会——「天長皇帝為故中務卿親王講法華経願文」攷……………三七六

はじめに 三七六

一 法華八講とは何か 三七八

二 「故中務卿親王のための願文」と怨霊説 三八六

おわりに——怨霊慰撫の法会—— 三九二

第四章 空海と広智禪師……………四〇七

はじめに 四〇七

一 広智禪師あて書状の分析 四〇八

二 「十喻を詠ずる詩」の分析 四二四

三 広智禪師の生涯と思想 四二五

四 二人の出逢いとその契機 四三三

おわりに 四六

附論1 空海と田少弐……………四四一

はじめに 四二

一 先行研究の検討 四三

二 大宰府の官人構成と少弐 四四五

三 田少弐とは誰か 四四九

おわりに——空海書写の『千手儀軌』—— 四五二

附論2 弘福寺別当攷……………四六五

はじめに 四六五

一 六通の太政官牒 四六六

二 『御遺告』の縁起第三——空海への給与説—— 四七二

三 先行研究の検討 四七三

四 検校権律師・寿長辞退の理由 四七九

五 真雅の別当補任説 四八一

おわりに——給与説の真実—— 四八五

第四部 真言宗の年分度者

第一章 最晩年の空海……………五〇二

はじめに 五〇二

一 天長七年以降の空海の事績 五〇四

二 後七日御修法上表文の検討 五二〇

三 空海と藤原三守 五三六

おわりに 五三三

第二章 三業度人の制……………五三三

はじめに 五三三

一 承和二年正月の太政官符 五三四

二 承和二年八月二十日付の太政官符 五五四

おわりに 五六一

第三章 三業度人の制の変遷……………五六七

はじめに 五六七

一 空海による三業度人の制の新設 五六八

二 先行研究の検討 五七〇

三 真濟による改革——三人から六人へ—— 五七一

四 真然による改革——承和二年への回帰—— 五七五

五 益信の改革——ふたたび東寺で課試を—— 五八二

六 寛平法皇の英断——六人から十人へ—— 五八八